

## Marhay na hapon po saindo gabos!

私は2010年10月から青年海外協力隊員としてフィリピンのルソン島南部にあるナガという街に家畜飼育という職種で派遣されています。

配属先は Central Bicol State University of Agriculture:国立ビコール農業大学、アニマルサイエンス学科。活動内容は学生たちや大学周辺農家に対し基本的な家畜飼育技術を支援することです。

現在、活動から約1年が経過し、ようやくこちらの生活には慣れてきたところですが、言葉の壁、国際協力の難しさを痛感しています。

今回は私の日々の活動について紹介したいと思います。私はアニマルサイエンス学科、また獣医学科で特別授業を行っています。あくまでボランティア、サポートをする立場なのでレギュラーで教鞭をとることはありません。学生が日本の畜産技術についてどんなことが知りたいか、リクエストをとり、授業にあたっています。（なぜか先生方からのリクエストもありますが…。）授業は基本的には英語ですが、英語が苦手な学生もいるのでビコール語という現地語を混ぜて行います。

フィリピンでの農畜産業は機械などが使われておらず、若い世代が多いということもあってほとんどがマニュアルです。そのため少子高齢化社会の日本の農畜産業の現場がどのように行われ、どのように日本の食卓がささえられているのか興味があるようです。また、畜産だけでなく動物福祉、ペットブーム、捕鯨など、日本が抱える問題についても強い関心が寄せられています。

日本が今現在抱えている問題は、今後のフィリピンにも起こりうることなので、これからフィリピンの社会を担う彼らに少しでも役に立てば嬉しいです。

もう一つは大学近隣の村の巡回です。週に3~4回、5件程の庭先養豚を行っている農家に対し飼育指導、人工授精、ワクチン接種などを行っています。当初は指導するにあたり、仕事への概念の違い、道具や薬品が当たり前にあった日本のやり方とのあまりの違いに戸惑い、思うようにいきませんでした。しかし彼らと話し、彼らのやり方を知るうちに、単なる押し付けでなく彼らができる範囲内で教えられることを考えなくては、と思うようになりました。常に柔軟性を持つことが今後の活動の課題です。

こちらでの生活はもちろん良いことばかりではありませんが、現代の日本では失われてしまったものが息づいており、この一年で彼らからたくさんのことを学ばせてもらいました。これからフィリピンが発展しても、人々の暖かさ、大らかさは変わらずにいて欲しいと思います。

今日本は冬ですね。フィリピンでは一年を通して夏の気候です。穏やかな国民性はこの環境からも影響されていますが、私はここに来てから時間の流れを感じることができず、少し寂しく感じています。

皆様お体に気をつけて、季節の移り変わりを楽しんで下さい。それでは。

佐々木花菜さん（平成 24 年 1 月）



授業風景



学生たちは好奇心いっぱいです



今でも耕うんには水牛を使います



大学に農家の方々を招き、人工授精のセミナーを行っています



農家さんとの何気ない会話の中にも活動のヒントが



豚たちものびのびしています